

# 「特別支援教育実践研究センター紀要」

## 第8号の発刊にあたって

令和5年度のセンター事業の発達相談では、発達障がいの特性を有するとともに、特定の分野に突出した才能（IQが130以上）を併せ有する、いわゆる2E（Twice-Exceptional）のニーズのある子どもの発達相談が増加してきました。令和4年9月に文部科学省から、「特定分野に特異な才能のある児童子どもに対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議」の審議のまとめが公表されました。この方針により、発達障がいへの支援と、優れた才能への支援の二重の特別支援を展開していく「2E教育」の検討と実践の試みがはじまってきたことによるものと考えられます。

こうした2Eの子どもたちが授業中に困っていることの共有点として、「授業内容が簡単でつまらない」、「発想や思考の回転に書字速度が追いつけないことにストレスを感じる」、「自由な発想による絵や作文は何を書けばよいかわからない」などが挙げられます。こうした状況に気づかずに対応が遅れることで、次第に自信や意欲を失い、不登校や他者への反発が顕著になっていることも見受けられます。得意な分野の能力や興味を伸ばし、不得意なことを補うことにいかす教育が一層求められてきています。

このように、これまでの特別支援教育の取組に、さらに新たな視点や課題が提起されてきたことによる「新たな特別支援教育の研究・研修」や、「教員、支援者、保護者等からの相談支援」を一層推進していくことが本センターの使命と考えています。

このたび、令和5年度大阪大谷大学特別支援教育実践研究センターの実践と成果を集約した紀要第8号が刊行されることになりました。本紀要が、今後の特別支援教育の進展に寄与することを願うとともに、多くの方々にご高覧いただき、ご意見、ご指導をいただければ幸いです。

最後に、本紀要第8号の発刊にあたり、ご協力いただきました皆様に厚くお礼申し上げます。

令和6年2月

大阪大谷大学 教育学部  
特別支援教育実践研究センター長  
教授 小田 浩伸